

委託事業実施内容報告書
平成30年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(A)】

実施内容報告書

団体名：NPO多文化共生プロジェクト

1. 事業の概要

事業名称	福岡市及びその近郊で活動する日本語ボランティアのためのカリキュラム案の普及を基軸にしたエンパワーメント事業
事業の目的	平成28～30年度の3年計画で行っているプログラム(A)の集大成を行う。まず福岡市においては生活場面に基づいた教室活動を行う日本語ボランティア間の自律的なネットワークを創出する。このネットワークは福岡市にある約40の日本語ボランティア教室を横断するものである。次に近郊地域の糸島市においては「日本語ひろば・いとしま」が生活場面に基づいた教室活動を導入するための研修を行う。糸島市は九州大学の移転に伴い留学生の家族が多く生活し始めている。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	福岡市は在住外国人が増加する一方で日本語ボランティア教室に通う外国人が全体として減少している。福岡市が関わる日本語ボランティア研修は養成講座のみであり、現役の日本語ボランティアを対象とした研修は行われていない。養成講座では生活場面に基づいた教室活動が扱われるが、現場の日本語ボランティア教室は文型中心であるため養成講座と実際の教室の差がある。また近郊地域では九州大学が移転している伊都地区(福岡市西区)に隣接する糸島市において留学生の家族が多く生活し始めている一方で、日本語ボランティア教室である「日本語ひろば・いとしま」は「生活者としての外国人」を対象にした教室活動を行う体制が整備されていない。
事業内容の概要	(1)日常生活における自己実現をテーマにした日本語教室の設置 外国人が最も多く生活している福岡市東区において、カリキュラム案を活用した日本語教室を設置し公開した。 (2)福岡市における日本語ボランティアネットワーク創出のためのワークショップと「日本語ひろば・いとしま」における研修 福岡市においては生活場面に基づいた教室活動を行う日本語ボランティアがネットワークをつくり取り組んでいくためのワークショップを行った。次に糸島市においては「日本語ひろば・いとしま」が生活場面に基づいた教室活動を行うための研修を行った。 (3)日常生活の多様な接触場面に基づいたイラスト教材の作成 日本語ボランティアが初期指導において生活場面に基づいた教室活動を行えるように様々な接触場面に基づいたイラスト教材を作成した。
事業の実施期間	平成30年6月～平成31年3月（10か月間）

2. 事業の実施体制

(1)運営委員会

【運営委員】

1	松永典子	九州大学日本語教育講座・教授
2	廣門真知子	アジアマーケティング株式会社・常務取締役
3	レグミ・スندگان・マニ	株式会社大伸商会・統合マネージャー
4	古川美穂子	かすがにほんごひろば・代表
5	野口照代	小さな国際交流友の会・代表
6	青木ふみか	えふえいぎ日本語教室・代表
7	深江新太郎	NPO多文化共プロジェクト・代表



【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成30年7月30日 (月) 10:00～12:00	2時間	愛和外語学院	松永典子、廣門真知子、古川美穂子、野口照代、青木ふみか、深江新太郎	1. 事業計画全体の説明 2. 人材育成(福岡市)を行う会場の再検討
2	平成30年10月31日 (水) 10:00～12:00	2時間	愛和外語学院	廣門真知子、古川美穂子、野口照代、レグミ・スندگان・マニ、深江新太郎	1. 日本語教室設置の結果報告、課題の整理 2. 人材育成(糸島市)の経過報告、課題の整理
3	平成31年3月19日 (火) 10:00～12:00	2時間	愛和外語学院	松永典子、廣門真知子、古川美穂子、深江新太郎	1. 平成31年度の取り組みの課題について意見交換 2. 平成30年度の事業結果の報告

(2)地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	日本語教育の実施では福岡市東区の日本語教育機関である愛和外語学院と連携した。本連携によりカリキュラム案を活用した効果的な教室活動が実施、公開できた。人材の養成・研修では九州大学日本語教育講座と連携した。九州大学日本語教育講座との連携により「日本語ひろば・いとしま」だけでなく九州大が移転する伊都地区の日本語ボランティアの継続的な支援が可能となる。日本語教育を行うための教材の作成では生活場面に基づいた教室活動を導入した「かすがにほんごひろば」と連携した。本連携により現場にそくした教材作成が可能となった。
------	--

(3)中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制	(1)運営委員会 運営委員のメンバーは九州大学の専門家、地域日本語教育コーディネーター、日本語ボランティアの代表者、在住外国人の就労支援を行う企業幹部であった。中核メンバーの深江がコーディネーターを行った。 (2)日本語教育の実施 日本語教育の専門機関でありカリキュラム案を活用した教室活動に実績を持つ愛和外語学院と連携し実施した。中核メンバーの妹川が指導の中心であった。 (3)日本語教育を行う人材の養成・研修 糸島市における「日本語ひろば・いとしま」の研修は九州大学日本語教育講座と連携した。中核メンバーの深江が講師とコーディネーターを行った。 (4)日本語教育のための学習教材の作成 日本語教育の実施における愛和外語学院での教室活動を通して、接触場面のイラスト教材を作成した。作成に際し「かすがにほんごひろば」と連携し現場の意見を取り入れた。中核メンバーの深江がコーディネーターを行った。
----------	--

3. 各取組の報告

日本語教育の実施【活動の名称:日常生活における自己実現をテーマにした日本語教室】										
目的・目標	日本で生活する外国人一人ひとりのライフステージに応じた日常生活における実現したいことを軸に生活場面に基づいた教室活動を行うことで在住外国人のエンパワメントを行う。またその全ての教室活動を日本語ボランティアに公開することで生活場面に基づいた教室活動の入り口をつくる。									
内容の詳細	<ul style="list-style-type: none"> ・福岡市で外国人が最も多く生活する福岡市東区で実施した ・福岡市東区の日本語教育機関である愛和外語学院と連携した ・日本語教育の専門家による教室活動を基にカリキュラム案の活用事例をつくり公開した ・カリキュラム案を活用するにあたり次の2つを重要視した ・参加する外国人一人ひとりのライフステージを尊重すること ・参加する外国人一人ひとりが日常生活で実現したい小さな望みを聞くこと ・以上の2点より、教室活動の目的は在住外国人一人ひとりの日常生活における自己実現とした ・使用教材は平成28、29年度に本事業において作成した教材を主として用いた ・クラスは2クラスに分け参加者である外国人の声を丁寧に聞き教室活動に反映させた 									
実施期間	平成30年6月19日～平成30年10月4日	授業時間・コマ数	1回2時間 × 30回 = 60時間							
対象者	福岡市東区及びその近郊で生活する外国人	参加者	総数 16 人 (受講者 12 人, 指導者・支援者等 4 人)							
カリキュラム案活用	参加する外国人の生活状況に合わせて生活上の行為の事例を選び教室活動の話題と場面を考えるために「カリキュラム案について」(pp.12-13)を参照した。									
使用した教材・リソース	平成28、29年度の本事業における作成教材及び自作教材									
受講者の出身 (ルーツ)・国内 訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
					3人		1人			
エジプト(4人), シリア(2人), パレスチナ(1人), タンザニア(1人)										
日本語教育の実施内容										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名		
1	平成30年6月19日 (火) 18:00～20:00	2	愛和外語学院	12	自己紹介	受講者が4グループに分かれ、そこに指導者が1人ずつ入り自己紹介を行った。指導者が受講者全員と話ができるようにローテーションを行った。	妹川幸代 小栗鶴 田上菜穂 李紅蘭	なし		
2	平成30年6月21日 (木) 18:00～20:00	2	愛和外語学院	10	食材を買う	受講者がどこで、どのように食材を買っているか聞いた。チラシを用い2000円以内で買い物をする活動を行い、魚の内臓を出してもらうなどの会話場面の練習を行った。	妹川幸代 李紅蘭	なし		
3	平成30年6月26日 (火) 18:00～20:00	2	愛和外語学院	11	食材を買う	6月21日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、食材を買うというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 李紅蘭	なし		
4	平成30年6月28日 (木) 18:00～20:00	2	愛和外語学院	12	洋服を買う	受講者がどこで、どのように洋服を買っているか聞いた。自分の好きな色やデザインを伝える活動を行い、試着するなどの会話場面の練習を行った。	妹川幸代 李紅蘭	なし		
5	平成30年7月3日(火) 18:00～20:00	2	愛和外語学院	11	洋服を買う	6月28日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、洋服を買うというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 李紅蘭	なし		
6	平成30年7月5日(木) 18:00～20:00	2	愛和外語学院	9	コンビニを利用する	受講者がいつ、どんな時にコンビニを利用するか聞いた。自分の国にある便利なお店を紹介する活動を行い、トイレ使用を申し出るなどの会話場面の練習を行った。	妹川幸代 小栗鶴	なし		
7	平成30年7月10日 (火) 18:00～20:00	2	愛和外語学院	12	コンビニを利用する	7月5日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、コンビニを利用するというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 小栗鶴	なし		
8	平成30年7月12日 (木) 18:00～20:00	2	愛和外語学院	9	食事に行く	受講者が好きな食べ物、食べられないものなどを聞いた。料理の作り方を説明するという活動を行い、レストランで食材を尋ねるなどの会話場面の練習を行った。	妹川幸代 小栗鶴	なし		
9	平成30年7月17日 (火) 18:00～20:00	2	愛和外語学院	12	食事に行く	7月5日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、食事に行くというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 小栗鶴	なし		

10	平成30年7月19日 (木) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	11	病院に行く	受講者がいつ、どんな時に病院に行ったか聞いた。自分の健康状態を確認する活動を行い、病院の受付で自分の症状を伝えるなどの会話場面の練習を行った。	妹川幸代 小栗鶴	なし
11	平成30年7月24日 (火) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	12	病院に行く	7月19日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、病院に行くというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 小栗鶴	なし
12	平成30年7月26日 (木) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	11	救急、災害	受講者が日本で災害にあったか、避難場所などを聞いた。非常袋に何を入れるかという活動を行い、救急時の電話対応の会話場面の練習を行った。	妹川幸代 小栗鶴	なし
13	平成30年7月31日 (火) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	8	救急、災害	7月26日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、災害、救急に行くというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 小栗鶴	なし
14	平成30年8月2日(木) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	10	目的地に行く	受講者がどのような交通機関を用い出かけているかを聞いた。自分の家から動物園まで行くという活動を行い、道を尋ねるなどの会話場面の練習を行った。	妹川幸代 田上菜穂	なし
15	平成30年8月7日(火) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	9	目的地に行く	8月2日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、目的地に行くというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 田上菜穂	なし
16	平成30年8月9日(木) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	11	不動産屋に行く	受講者がどのような部屋に住んでいるかを聞いた。自分の今の部屋の満足度を伝えるという活動を行い、不動産屋で希望の部屋を伝える会話場面の練習を行った。	妹川幸代 田上菜穂	なし
17	平成30年8月21日 (火) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	12	不動産屋に行く	8月9日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、不動産屋に行くというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 田上菜穂	なし
18	平成30年8月23日 (木) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	10	親しく人と関わる (自分の町)	受講者が福岡についてどのように思っているかを聞いた。自分の国の有名な場所や物を伝えるという活動を行い、学習者同士で会話を行った。	妹川幸代 田上菜穂	なし
19	平成30年8月28日 (火) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	12	親しく人と関わる (自分の町)	8月23日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、自分の町というテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 田上菜穂	なし
20	平成30年8月30日 (木) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	11	親しく人と関わる (私の1日)	受講者が平日、どんな生活をしているかを聞いた。週末したことについて伝えるという活動を行い、学習者同士で会話を行った。	妹川幸代 田上菜穂	なし
21	平成30年9月4日(火) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	10	親しく人と関わる (私の1日)	8月30日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、私の1日というテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 田上菜穂	なし
22	平成30年9月6日(木) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	9	区役所に行く	受講者が区役所に行った経験について聞いた。日本に来てからの節目となる出来事について伝える活動を行い、区役所で来庁目的を伝える会話場面の練習を行った。	妹川幸代 李紅蘭	なし
23	平成30年9月11日 (火) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	12	区役所に行く	9月6日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、区役所に行くというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 李紅蘭	なし
24	平成30年9月13日 (木) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	8	近所と関わる	受講者が地域行事に参加しているなどを聞いた。それぞれの地域における決まりごとなどを伝える活動を行い、掃除当番を代わってもらう会話場面の練習を行った。	妹川幸代 李紅蘭	なし
25	平成30年9月18日 (火) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	11	近所と関わる	9月13日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、近所と関わるというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 李紅蘭	なし
26	平成30年9月20日 (木) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	10	旅行に行く	受講者が日本で旅行に行ったかを聞いた。自分の行きたい場所、その理由を伝える活動を行い、旅行会社でホテルの希望などを伝える会話場面の練習を行った。	妹川幸代 李紅蘭	なし
27	平成30年9月25日 (火) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	9	旅行に行く	9月20日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、旅行に行くというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 李紅蘭	なし

28	平成30年9月27日 (木) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	11	メッセージを伝える	受講者がどんな時にメッセージを送るか聞いた。これまでもらった手紙などを伝える活動を行い、不在連絡票を受け取って郵便局に電話する会話場面の練習を行った。	妹川幸代 小栗鶴	なし
29	平成30年10月2日 (火) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	8	メッセージを伝える	9月27日に出した自宅課題の確認を行った。その後で、メッセージを送るというテーマと関連のある漢字を学習した。最後に、その漢字を書道で何度も練習した。	妹川幸代 小栗鶴	なし
30	平成30年10月4日 (木) 18:00~20:00	2	愛和外語学院	11	修了式	修了証を渡し、受講者が1人1人、スピーチを行った。たこ焼きなどを作りながら、交流を行った。	妹川幸代 小栗鶴 田上菜穂 李紅蘭	なし

(1) 特徴的な活動風景(2回分)

○取組事例①

【第10回 平成30年7月19日】

(1) 学習者自身のことを尋ねる問いかけから始まった。

①日本へ来てから病院へ行ったことがありますか、②どうして病院へ行きましたか、③病院で何か困りましたか、④いつも健康のために何をしていますか

(2) 学習者が自分の健康状態を表現する活動を行った。

①今の健康状態をチェックする。(例)あたまがいたいです、しょくよくがありません、おなかがいたいです、のどがいたいです、など

②習慣についてチェックする。(例)たばこをすいますか、おさけをのみますか、ごはんをたべますか、うんどうをしますか、など

(3) 病院で症状を伝える会話場面の練習をした。

①病院で受け付けをする

②医者に症状を伝える



○取組事例②

【第14回 平成30年8月2日】

(1) 学習者自身のことを尋ねる問いかけから始まった。

①みなさんの国にどんなの乗り物がありますか、②日本でどこへ遊びに行きましたか、③どうやって行きましたか、④行きたいところがありますか

(2) 学習者が自分の行きたいところまで行き方を表現する活動を行った。

①福岡市動物園に目的地を決める、②自分のうちから最初の公共交通機関であるJRの駅までどうやって行くか、何分かかかるかを記す、

③JRの駅から次の公共交通機関である西鉄バスの停留所までどうやって行くか、何分かかかるかを記す、④西鉄バスの停留所から目的地の動物園までどうやって行くか、何分かかかるかを記す

(3) 目的地までの行き方を尋ねる会話練習をした。

①JRの駅で乗り場を尋ねる



(2) 目標の達成状況・成果

アンケート結果の概要は次の通りである。回答者総数8名。I 選択式(1)本講座の内容に満足していますか?①満足している6名、②少し満足している2名。(2)本講座を受けて前よりも日本の生活でできることが増えましたか?①できることが増えたと思う2名、②少しできることが増えたと思う6名、(3)本講座を受けて前よりも日本語で自分のことが話せるようになりましたか?①話せるようになったと思う2名、②少し話せるようになったと思う6名、(4)本講座を受けて日本語学習への興味は大きくなりましたか?①大きくなった6名、少し大きくなった2名。II 自由記述(1例を抜粋)「自信を持つことができた。病院に一人、または家族で行く日本語能力を持つことができた。日本語ができる友達の手助けなしで、区役所で文書を完成できる。自信を持つことができた。病院に一人、または家族で行く日本語能力を持つことができた。日本語ができる友達の手助けなしで、区役所で文書を完成できる」。以上から本教室活動は参加者のエンパワーメントにつながったと考えられる。

(3) 今後の改善点について

アンケートには改善できる点について次のような記述があった。「文法の学習、簡単な漢字からの学習、日本文化の学習(月に1回、生け花や着物、浴衣の着方など)を行うこと」「日本語の文法を教えることも必要」。本教室活動は、日常の話題、場面を基に参加者一人ひとりが自分のことを表現できることを主眼に置いた。その結果として、文法の説明は必要に応じて行い、系統立てた文法の学習支援を行わなかった。しかしこのアンケート結果から考えた時、日常の話題、場面において自分自身の思い、考えを表現する教室活動と系統立てた文法学習支援の両方が必要であると考えられる。教室活動の方法という面から考えた時、この点が課題である。次に実施体制という点では、九州大学の福岡市東区から福岡市西区への移転が平成30年度に完了したことを受け、次年度からは福岡市西区において留学生の家族が多く生活を行うことになる。したがって今後は福岡市西区において新たな教室設置が必要となる。

日本語教育を行う人材の養成・研修の実施【活動の名称:①福岡市における日本語ボランティアネットワーク創出のためのワークショップ, ②「日本語ひろば・いとしま」が生活場面に基づいた教室活動を導入するための研修】

目的・目標	①福岡市において生活場面に基づいた教室活動を行う日本語ボランティア同士が教室を横断したネットワークをつくり新たな取り組みを行うためのワークショップを開催する。②糸島市において「日本語ひろば・いとしま」が増加した在住外国人のために教室単位で生活場面に基づいた教室活動を行うための研修を行う。									
内容の詳細	①福岡市における日本語ボランティアネットワーク創出のためのワークショップ(1回3時間×6回) ・事業企画, 創業支援を専門とする講師を招いた ・参加者一人ひとりの今の取り組みを起点に, 生活場面に基づいた教室活動をどのように取り入れるかグループワークを通して考えた ・在住外国人支援という広い視野で自分の取り組みを捉え直し自分にできる新たなことをグループワークを通して発見した ②「日本語ひろば・いとしま」が生活場面に基づいた教室活動を導入するための研修(1回3時間×6回) ・生活場面に基づいた教室活動を「日本語ひろば・いとしま」の現状にそくして行うためのワークショップを行った ・「日本語ひろば・いとしま」で行われている教室活動を活かしながら標準的なカリキュラム案を活用し生活場面に基づいた教室活動を行うワークショップを行った ・受講者の1人として参加した九州大学の日本語教育講座の大学院生から研修内容について助言を得た									
実施期間	平成30年6月2日～平成31年3月9日	授業時間・コマ数	① 1回3時間 × 6回 = 18時間 ② 1回3時間 × 6回 = 18時間 計36時間							
対象者	福岡市及びその近郊で活動を行う日本語ボランティア	参加者	総数 34 人 (受講者 31 人, 指導者・支援者等 3 人)							
カリキュラム案活用	文型シラバスの教科書を用いて生活場面に基づいた教室活動を行うために, 文型シラバスの教科書の「会話」部分から「生活上の行為」を見つける活動を行った。したがってカリキュラム案の121の基本的な「生活上の行為」を活用した。									
使用した教材・リソース	講師による自作教材									
受講者の出身(ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	1									33

養成・研修の実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	平成30年6月2日(土) 10:00～13:00	3	糸島市人権センター	12	外国人とのコミュニケーション	外国人とどのようにコミュニケーションをとるのかについて, ビデオ記録を基に考えた。	深江新太郎	妹川幸代(講義補助)
2	平成30年7月21日(土) 10:00～13:00	3	糸島市人権センター	11	モデル授業を見る	生活場面に基づいた教室活動のモデル授業を見て意見交換を行った。	深江新太郎	妹川幸代(講義補助)
3	平成30年8月4日(土) 10:00～13:00	3	糸島市人権センター	12	授業づくり	『みんなの日本語』を用いて生活場面に基づいた教室活動を行う方法についてモデルを基にグループで考えた。	深江新太郎	妹川幸代(講義補助)
4	平成30年9月1日(土) 10:00～13:00	3	糸島市人権センター	12	授業づくり	『みんなの日本語』を用いて生活場面に基づいた教室活動を行う方法についてモデルを基にグループで考えた。	深江新太郎	妹川幸代(講義補助)
5	平成30年10月13日(土) 10:00～13:00	3	天神イムズ ABSS内 セミナールーム	18	目標づくり	ワークショップを通して手に入れたいものを各自が考える目標づくりを行った。	森重裕香	深江新太郎(講義補助) 妹川幸代(講義補助)
6	平成30年11月10日(土) 10:00～13:00	3	天神イムズ ABSS内 セミナールーム	19	授業づくり	教室活動の目標を考え, 『みんなの日本語』をどのように利用するか考えた。	深江新太郎	妹川幸代(講義補助)
7	平成30年12月8日(土) 10:00～13:00	3	天神イムズ ABSS内 セミナールーム	10	授業づくり	学習者と教師のやりとりの記録を基にどのようにやりとりを行えばいいか考えた。	深江新太郎	妹川幸代(講義補助)
8	平成31年1月12日(土) 10:00～13:00	3	天神イムズ ABSS内 セミナールーム	15	授業づくり	『みんなの日本語』の「会話」部分から教室活動を行う方法についてモデルを基に具体的に考えた。	深江新太郎	妹川幸代(講義補助)
9	平成31年2月2日(土) 10:00～13:00	3	糸島市人権センター	9	授業づくり	『みんなの日本語』の「会話」部分から教室活動を行う方法についてモデルを基に具体的に考えた。	深江新太郎	妹川幸代(講義補助)
10	平成31年2月9日(土) 10:00～13:00	3	天神イムズ ABSS内 セミナールーム	14	日本語支援以外の生活支援	「生活者としての外国人」のための支援を多角的に捉え, 日本語支援以外の支援について考えた。	森重裕香	深江新太郎(講義補助) 妹川幸代(講義補助)
11	平成31年3月2日(土) 10:00～13:00	3	糸島市人権センター	10	授業づくり	『みんなの日本語』第19課を素材に, 日常の話題から学習者とやりとりを行い, 学習文型に焦点を当てていく方法を考えた。	深江新太郎	妹川幸代(講義補助)
12	平成31年3月9日(土) 10:00～13:00	3	天神イムズ ABSS内 セミナールーム	13	日本語支援以外の生活支援	第10回で出し合った日本語支援以外の生活支援のアイデアを基に, 具体的な行動に向けて考えを進めた。	森重裕香	深江新太郎(講義補助) 妹川幸代(講義補助)

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第4回 平成30年9月1日】

「日本語ひろば・いとしま」での研修である。「日本語ひろば・いとしま」は文型シラバスの教科書である『みんなの日本語』を用いることが多い現状であった。スタッフからは、『みんなの日本語』を用いて生活場面に基づいた教室活動が行えるような研修にして欲しいというリクエストが出た。そこで『みんなの日本語』を「会話」から行う教室活動を提案した。まず、「標準的なカリキュラム案」を活用し「会話」内にある「生活上の行為」を見つけ、それがどのような表現か抜き出した。例えば『みんなの日本語初級 I』第14課であれば、「タクシーに乗り目的地を告げる」という「生活上の行為」があり、それが「あの信号を右へ曲がってください」という表現で成り立っている。そこで、ペアワークで「生活上の行為」とそれを成り立たせる表現と抜き出した。本研修では、『みんなの日本語』の「会話」に含まれた「生活上の行為」を成り立たせる表現を中心に学習する方法を提案したため、練習A、B、Cもその表現が含まれたもののみを扱った。したがって、次にペアワークで相手への依頼を示す「てください」が含まれた練習Cを選び、教室活動の流れを考えた。



○取組事例②

【第10回 平成31年2月9日】

福岡市及び近郊地域の日本語ボランティア、日本語教師を対象に行った研修である。この回では、「生活者としての外国人」のための支援について、日本語支援以外にどのような支援があるか考えた。まず「生活者としての外国人」が抱える問題について、①対象の特徴(〇〇な特徴を持った人が)、②摩擦を起こしている周囲の状況(周囲の〇〇な状況の中で)、③具体的な不利益(〇〇ができず)、④不利益によっておかれる境遇(〇〇な状況になる)という観点から具体的に考えた。次に、「生活者としての外国人」以外に対する支援について考えた。直接「生活者としての外国人」のための支援を考えるのではなく他の視点を取り入れることでアイデアを出しやすくするためにである。最後に「生活者としての外国人」に対する日本語支援以外の支援について考えた。参加者一人一人のアイデアについては、写真により記録を行い、次回のワークショップで共有する。



(2) 目標の達成状況・成果

アンケート結果の概要は次の通りである。回答者総数25名。(1)本ワークショップに参加して、地域で生活する外国人に対する日本語教育への理解は深まりましたか。①深まったと思う14名、②まあまあ深まったと思う9名、③深まらなかった0名、④分からない1名。(2)自由記述(数例を抜粋)「一度にたくさんのことを学ぶのではなく、その場面の流れとかをつかんで、買い物などの会話から、学習者が持って帰れる成果があれば実生活に活かして、次の学習意欲にもつながるのかなと思いました」「日本語教室での活動のみならず他の全ての活動に役立つ考え方を教えていただき、これからの活動にどのように生かしていくか考えるだけでワクワクします。いろいろな意見も聞けてアイデアが広がりました。」「訂正は最後にする、学習者に考えさせる、最後に提示した授業のすすめ方、自分も実践してみたいです。参考になります」。以上から本研修は参加者のエンパワーメントにつながったと考えられる。

(3) 今後の改善点について

参加者から研修の継続を望む声が上がっている。ただし文化庁委託事業としての実施は本年度までとなっているため、新たな実施体制が必要である。そこで平成31年度は、出版社のアルクと九州大学の日本語教育講座と連携して福岡市において実践研修を行うことが決まっている。回数は年3回の予定である。内容としては、本年度が日本語ボランティア現場で広く使われている『みんなの日本語』という文型シラバスの教科書を「生活者としての外国人」のための教室活動として使うにはどうしたらよいかという観点からシリーズ化したのに対し、平成31年度は教室活動を多角的に捉え直すオムニバス形式の内容となる予定である。ただし本年度の内容に対する継続した研修の要望も出てきているため、本年度の内容を継続した研修は本団体単独の事業として実施予定である。

日本語教育のための学習教材の作成【教材の名称：日常にある30の日本語使用場面のイラスト教材】

目的・目標	日本語ボランティアが初期指導において日常生活の様々な日本語使用場面を日本語で提示するのは難しいためそのイラスト教材を作成する。		
内容の詳細	<ul style="list-style-type: none"> ・生活上の行為によって起きる様々な接触場面のイラスト教材を作成した。 ・例えば「教材例集」の「物品購入・サービスを利用する」(pp.92-105)における「会話例1牛乳はどこですか」「会話例2すみません、みかんはありますか」をイラストで作成(「教材例集」では文字表記) ・「教材例集」のように文字で示された会話場面は、初期指導において日本語ボランティアが実際の教室活動を行う場合、場面を日本語で提示するのが難しいためイラスト化した。 ・また「試食はどうですか?」と勧められた場面でどうするかなど、多様な接触場面のイラスト教材を作成した。 ・「かすが・にほんごひろば」と連携し日本語ボランティア現場で汎用性がある教材を作成した。 		
実施期間	平成30年6月19日～平成31年3月6日	作成教材の 想定授業時間	1回 2時間 × 30回 = 60 時間
対象者	日本語ボランティア	教材の頁数	51ページ
カリキュラム案活用	まず「カリキュラム案について」(pp.12-13)により基本的な121の生活上の行為を確認した。次に「カリキュラム案について」(pp.119-154)にはより細かな総数1502の生活上の行為が書かれているため参考にした。最後に「教材例集」においてどのような接触場面でどのようなイラスト教材が使われているかを確認しイラスト教材の作り方を参考にした。		
事業終了後の教材活用	まず本事業で生活場面に基いた教室活動を導入した「かすが・にほんごひろば」「日本語ひろば・いとしま」で活用する。次に福岡市で活動する日本語ボランティアを対象にした研修を開催しその中で紹介する予定である。		
成果物のリンク先	http://www.nihongo-ews.jp/		



4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

平成28～30年度の3年計画で行っているプログラム(A)の集大成を行う。まず福岡市においては生活場面に基づいた教室活動を行う日本語ボランティア間の自律的なネットワークを創出する。このネットワークは福岡市にある約40の日本語ボランティア教室を横断するものである。次に近郊地域の糸島市においては「日本語ひろば・いとしま」が生活場面に基づいた教室活動を導入するための研修を行う。糸島市は九州大学の移転に伴い留学生の家族が多く生活し始めている。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

①九州大学移転地区の元岡地区において日本語ボランティア教室を立ち上げる基礎的な連携となった
平成31年度に福岡市西区の公民館事業として元岡日本語教室を立ち上げる
九州大学の日本語教育講座が企画して行い、本団体の代表である深江がコーディネーターを務める
②研修参加者間において、在住外国人支援を行う固有の目的を持ったネットワークが強化、形成された
研修の参加者間で「外国から来たこどもたちを支援するグループ」が強化され、「ムスリムが日本で生活しやすくなることを支援するグループ」が形成された

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

標準的なカリキュラム案の特徴は、日本で暮らす外国人を在留区分ではなく日本で生活する「生活者としての外国人」と捉え、日本で生活する上で必要な「生活上の行為」を明記した点である。ただ実際の日本語ボランティアの現場では、例えば本事業が対象とする福岡市及び近郊地域においては、文型シラバスの教科書が多く用いられている現状である。そこで本事業では、文型シラバスの教科書内にある「会話」部分に着目し、その「会話」内にどのような「生活上の行為」が含まれているか考えるために、標準的なカリキュラム案を活用した。普段、文型シラバスに基づき提出文型に目が行きがちな教師、支援者にとり、「生活上の行為」から文型シラバスの教科書を捉え直すことは大きな発見となった。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果、等

教室設置においては、愛和外語学院の協力を得た。愛和外語学院との協力により、日本語教育の専門家によるカリキュラム案を活用した教室活動が行え、公開できた。公開した教室活動に計14名の見学があった。人材育成においては、九州大学の日本語教育講座の協力を得た。「日本語ひろば・いとしま」における研修に、九州大学日本語教育講座の大学院生が参加することで、より活発に研修を行うことができた。教材作成においては、「かすが・にほんごひろば」の協力を得た。作成教材について、ボランティア現場の意見を聞くことで、使いやすい教材を考える助力となった。また運営委員会において事業説明を行った際、委員の一人であるアジア・マーケティング会社の常務取締役より、人材育成の会場について、より利便性、公共性が共に高い場所の提供を受けた。当初は福岡市西区にある会場であったが、福岡市中央区にある会場に変更が行え、参加者がより来やすい環境で研修が行えた。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

教室設置においては、福岡マシジのメーリングリストとネパール人コミュニティのネットワークを活用した。福岡市東区は、イスラム教徒が多く生活しているため、周知で福岡マシジと連携することで、多くのイスラム教徒に教室の案内が行えた。また同地区は、近年ネパール人留学生が増え、その家族が暮らし始めているため、ネパール人コミュニティに周知を行うことで、ネパール人の参加につながった。人材育成においては、平成28、29年度の参加者、平成30年度に自立した「かすが・にほんごひろば」が行う日本語ボランティア養成講座の受講者へ周知を行い、本年度の参加につながった。継続した参加により、研修の中で、生活場面に基づいた教室活動の実践につなげることができた。平成31年度は、平成28～30年度の成果を基にした人材育成のための研修を福岡市NPOボランティア・交流センターで行う予定である。

(6) 今後の課題について

①地方自治体による地域日本語教育コーディネーターの配置
地域社会における多文化共生の課題を包括的かつ具体的に捉え、関連機関と連携して問題解決に向かうためには、地方自治体が日本語教育コーディネーター制度を配置する必要がある。4(2)で記した平成31年度に取り組む福岡市西区役所の事業を通して、地方自治体に日本語教育コーディネーターの意義を示していく必要がある。②「生活者としての外国人」のための総合教材の作成
日常の話題・生活場面・言語知識が統合的に配置され、使用者である日本語ボランティア、学習者に使いやすい総合教材を出版社と連携して開発する必要がある。これまで作成した教材はそれぞれの目的に応じ活用できるが、例えば初級学習者を対象にした6か月の学習期間で行う総合教材があればよりよい支援が行える。

(7) その他参考資料

- ①人材育成実施のためのフライヤー
- ②教室設置参加者による自由記述のアンケート結果
- ③人材育成参加者による自由記述のアンケート結果